

宇都宮の山車「火焰太鼓」 百年ぶりに復活へ



新石町山車『火焰太鼓』(明治42年の巡回写真)=宇都宮市教育委員会提供

二年後、菊水祭に巡行

「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」



オリオンスクエアへの搬入風景（西地区文化祭）=「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」提供

民俗文化を伝承、街づくりのシンボルに

江戸時代、宇都宮の中心街を華やかに彩った二荒山神社の菊水祭。氏子町から集結した山車、屋台の巡行は、下野国最大の祭礼で、その賑わいぶりは関東有数の祭りとして鳴り響いた。

しかし、時代の流れとともに衰退し、各地に譲渡されたり、宇都宮大空襲などによって焼失、ほとんど姿を消してしまった。

そして今、100年の時空を超えて〈菊水祭の華〉として知られた新石町山車『火焰太鼓』が復活の日を待っている。取り組んでいるのは「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」のメンバー。2年後の菊水祭に巡行する計画で、勇壮・華麗な姿がお披露目される。

宇都宮は二荒山神社の門前町として起つた。繁栄していくのは、江戸幕府が北方に対する防衛拠点として重視したことが大きい。元和五年（一六一九）、宇都宮城主となつた本多正純は、町割り（区画整理）を行い、門前町と城下町を結合させた。さらに現在の清住通りで日光道中（日光街道）を分岐させ、奥州道中（奥州街道）を大改修して通した。この地区には、本陣はじめ伝馬や旅籠の宿場、問屋場が設けられ、下級武士の住居、城下北部の守りを兼ねて寺院が配置された。これによつて近世城下町の基礎が築かれ、日光道中の追分・宇都宮宿は参勤交代や物流の中心地として大きく発展。江戸と東北地方を結ぶ宇都宮の宿場町として人馬の往来で賑わつた。

だが、戊辰戦争や大空襲など歴史の変遷の中で激動の波にもまれ、戦後の宇都宮は大きく変貌。特に都市計画事業の影響は街の様相を変えていった。日光街道（日光道中）の中心地だった清住通りも例外ではなく、昭和四十一年、小幡・清住地区が土地区画整理事業の実施地区として都市計画決定。清住通りと並行し



「城址公園まつり」に展示された新石町山車・火薬太鼓の残存物＝「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」提供

て新たな道路を開通させる計画が着々と進んでいる。

新しい街づくりを目指して

この大事業に対して地区内の住民たちは平成二十年に「小幡・清住まちづくり協議会」を発足させ、「懐かしき未来のまち小幡・清住」をテーマに新しい街づくりを目指して取り組んできた。さらに平成二十二年、下部組織として青壮年がメンバーとなり、旧日光街道沿道の歴史と文化を研究し、これを街の財産として街づくりに生かした提案を行う「清住通りまちづくり検討部会」が発足した。

こうした動きの中で、浮上してきたのが、「新石町山車・火薬太鼓」の復活だつた。メンバーの一人、田巻秀樹さんは知人の民俗研究家のアドバイスを受け、宇都宮にはかつて二荒山神社の氏子町三十九町に山車・屋台があり、菊水祭に巡行していたことを知った。そのほとんどは戊辰戦争で焼けたり、県内各地に売却され、戦争中に宇都宮大空襲で焼失してしまった。本郷町に山車、蓬

菜町と伝馬町に彫刻屋台が現存していることは分かっていた。その他、形はととのっていないが、山車の一部が残っているものがあった。それがまさに地元の「新石町山車・火薬太鼓」。昭和五十五年に旧新石町（現伝馬町と小幡一丁目の一部）場所は大通りを挟んだ追分から宇都宮市に寄贈され、宇都宮城址公園・清明館に保管・展示されていた。火薬太鼓や龍の彫刻、菊の花飾り、万灯が見事だつた。

その後、徳次郎町の智賀都神社の夏祭りに行き、研究家の講演を聴き、旧新田町（現清住町）のルーツを持つ彫刻屋台を見た。素晴らしい。田巻さんは決意した。

知人の檜山昌彦さん（新石町）に話をしたところ、「よし、やろう」となつた。さらに検討部会のメンバー高木順紹さんも賛同し、スクラムを組み、活動を開始。各方面に呼びかけたところ共鳴者が参集した。歴史民俗研究家、地元自治会幹部、文

化財と建築専門家、修復のプロ、二

荒山神社宮司、祭礼関係者、教育界や商工業・経済界の有力者、市街地活性化・まちおこしに取り組んでいた人達など多彩なメンバーがそろつた。

山車復活プロジェクト

構想を実現するため、平成二十三年七月、「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」を設立、新石町自治会長・檜山幸雄さんが会長に就任した。

設立趣意書には次のように書かれている。



山車の復元図=「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」提供

宇都宮市を代表する祭り「菊水祭」

化が図られてきた。

は、江戸時代の延宝元年（一六七三）に起源を持ち、発祥から今日まで三百余年の歴史を有する。その間、祭礼町、市民が主体となって繰り広げられた付け祭りには、各町から趣向を凝らした山車や屋台、練り物、手踊り狂言などが出現され、その規模

は江戸の天下祭りと肩を並べるほど、全国有数の祭りであったといわれる。

付け祭りは、各町が町の威信と力を結集して、住民総出で参加する一大行事であり、これにより宇都宮はにぎわい、人々の交流と経済の活性化が図られてきた。

幸いにも、市内上町区域にあった本郷町の山車、伝馬町や蓬莱町の屋台は焼失を免れた。また、江戸時代に建造された新石町の「火焔太鼓の山車」は、構造部材は失われているものの、装飾部分は良好な状態で残されている。

この時にあたり、私たちは戦禍をくぐり抜け、今日まで伝えられてきたこの貴重な「火焔太鼓の山車」を所有者である宇都宮市の協力のもと、多くの市民の賛同を得ながら往時の姿にみがえさせ、伝統の祭りを通して絆を深めると同時に、宮にぎわいを取り戻すため、当プロジェクトを設立するものである。

来年早々には発注へ

「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」のメンバーは、毎月一回宝勝寺に集まって定例会を開き、山車復活に向けた具体的な復元方法や進行計画などを検討してきた。熱心な

この山車の残存物は、昭和五十五年に旧新石町から市に寄贈され、長い間、市の施設で展示、保存されてきたが、平成二十三年五月、清住通りまちづくり検討部会は、新たなまちづくり推進の資源として、この山車の復活を提言した。また、同月、山車の調査に当たった各分野の専門家から「山車が地域固有の文化財として、歴史的にも、美術的にも価値が高く、早急に復元、活用すべきである」との意見をいただいた。

この時にあたり、私たちは戦禍をくぐり抜け、今日まで伝えられてきたこの貴重な「火焔太鼓の山車」を所有者である宇都宮市の協力のもと、多くの市民の賛同を得ながら往時の姿にみがえさせ、伝統の祭りを通して絆を深めると同時に、宮にぎわいを取り戻すため、当プロジェクトを設立するものである。

二荒山神社の氏子町に現存する山車・彫刻屋台



本郷町山車（宇都宮市指定文化財）



伝馬町屋台（栃木県指定文化財）



蓬莱町屋台（宇都宮市指定文化財）

=写真はいずれも池田貞夫氏提供=

討議の中から山車復元への道程が固まつた。

修復のため火鉢太鼓や「新石町」の名前の入った万灯、高欄、龍と菊の彫刻など山車の残存物を調査した結果、その全体像が明らかになつた。それによると、火鉢太鼓の山車は、箱型の土台から心柱が立ち、最上部には発光体と光線、火鉢太鼓が飾られ、中ほどに上下に龍の彫刻、下部に万灯が付き、大きな土台の四隅には御幣と菊の彫刻が配されていた。

高欄が残っているので、それを基にして大きさを割り出したところ、車輪から最上部までの高さが八・七メートルにも及ぶ巨大なものだつた。宇都宮城内に入る時には心柱を倒して引き込んだという。

高欄のデータから基本的な設計は出来た。まず安全に巡行するために「軸体」（土台）を優先して作ることになった。最大の難関は高さ。昔と違つて道路には信号・標識などの障害物がある。そこを巡回するのにはどうしたらよいか？①江戸時代と同じに心柱を倒す②江戸型のように心柱を降ろす昇降式一二つの方法があり、現在検討している。

次は安全に山車を操作するための車輪の設計が重要になつてくる。宇都宮式は外輪四輪だが、巡行の際の操舵性を考えた工夫が必要となる。

同プロジェクトは、こうした課題をクリアして、今年秋口までには設計図を完成させ、来年早々には第一次発注をする計画だ。順調に進めば、二年後の平成二十六年八月の「宮まつり」でお披露目、十月の「菊水祭」本番の晴舞台に登場し、多くの人達のロマンと希望を載せて巡行することになつてている。

メンバーは、いつの日か小幡・清住地区ゆかりの山車と屋台が追分スクエアの山車会館から秋空の下で連合渡御し、祭囃子が市内に響き渡ることを待ち望んでいる。

地域を越え 参加呼び掛け

山車を復元して巡行させるためにはかなり多額の費用が必要だ。龍や菊の彫刻はバラけて、虫食いもあつた。新しく山車土台・車輪を作らなくてはならない。この部分だけでも一千万円。最低限の修復と欠品補充などで約二千万円はかかる。さらに

龍の彫刻を塗り、金箔を貼り、高欄と金弊束の飾り金具に金箔を焼

き付けるなど完全に修復すると二倍

になるという。同プロジェクトでは、宇都宮市に賑わいを取り戻すこの街

おこし計画に共鳴してくれる人達か

らの温かな支援募金を呼びかけてい

る。

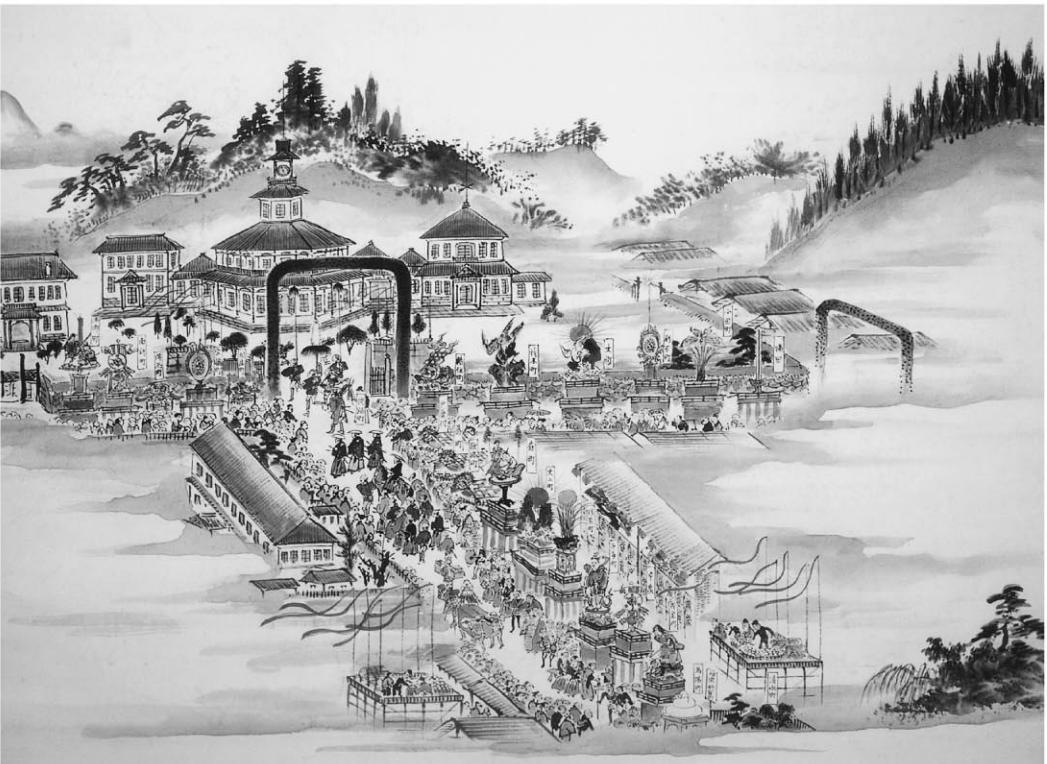
発起人で事務局長を務める田巻さんは、「火焰太鼓の山車」の復活にか

ける思いを次のように話している。

これから街づくりは、広域化していくことが必要。地域単位の「自治会」からエリアを広げて、いかに多くの人たちに関わってもらうかが大切になってくる。そのシンボルが「火焰太鼓の山車」だ。共鳴してくれる人たちが地域を越えて集まつてくる。宇都宮全体の顔になるものとして山車の復活を考えている。

山車は祭りに登場する民俗文化財、飾っているだけでなく、巡行して初めて価値がある。みんなが参加する街づくり、地域を越えて参加してもらう。みんなで組み立て、子供からお年寄りまでみんなで引っ張り、みんなで解体する—そういう方向性で山車を活用したい。

宇都宮全体のにぎわいを創出して、十台くらいの山車、屋台が巡回するようにしたいが、それができるかどうかは、この一台目の「火焰太鼓の山車」の復活にかかっている。散逸した宇都宮の山車や屋台が県内にはたくさんある。これが一堂に会して合同巡行すれば壮観な一大ページェントになる。



県庁新庁舎の開庁式祝賀の繰り出し=「県庁新設祝賀之図」(明治17年10月)=宇都宮市教育委員会提供

子供の頃に見た祭りの原風景は、

故郷の想い出としていつまでも心に残っていく。「火焰太鼓の山車」復

活を核に据え、これまで伝承されてきた郷土の文化遺産を引き継いでいくつもりだ。子供たちのお囃子もやりたい。西地区には西小学校児童の「ひまわり太鼓」グループがある。

子供囃子の巡回も検討している。この山車復活を弾みとして、地域の文化遺産の継承と活用、祭り・観光による地域おこしを推進して、次代へ故郷の民俗文化を伝えていくこうと思う。

山車復活募金にご協力を

■1口1万円

- 宮まつり、菊水祭、オリオン通りイベントの際は募金箱用意。

〈問い合わせ窓口〉

「宮のにぎわい 山車復活プロジェクト」事務局・檜山昌彦

● 住所／〒320-0035 宇都宮市伝馬町4-5うさぎや内

● TEL 028-634-6810 FAX 028-634-1295

● ホームページ／「宇都宮山車復活」で検索。